

第464回(11月27日開催)

出席委員(50音順・敬称略)

朝野 富三            荒巻 裕

大村 英昭           黒田 勇

木下 明美           櫻井 美幸

森 輝彦

書面参加

倉光 弘己

「わたし流ラジオ番組考」

(ラジオの役割・可能性)

今回は、特定の番組ではなく毎日放送のラジオ放送全般について意見交換を行った。審議会ではまず、ラジオ局の編成、制作、営業の現場担当者が、ラジオへの取り組みや展望などについて意見を述べた後、各委員からラジオ放送全般について率直な意見を頂いた。

荒巻委員

ラジオは一人で聞く機会が多いので、心の友という存在だ。特に、私を含め「男が寂しい時代」が来つつあると思うので、心の透き間を埋めてくれるような番組を考えてほしい。さらに世界の中でラジオがどう活用されているか、その可能性を探ることも大切だと思う。

黒田委員

文化としてのラジオを考えると、関西のラジオは非常に元気だと思う。ただ、モバイルメディア時代に対応するためには、もっと「街」に出るべきではないか。街は今、雑多な意味があふれた混沌とした空間だが、その中からラジオが何かを切り取ってくることはできると思う。その意味で、鶴瓶の「すわるラジオ」は画期的な先駆になるのではないか。

木下委員

男性にとって寂しい時代が来るといった話があったが、そういう男性、つまり子どもの頃はラジオと楽しくつきあっていた「元ラジオ少年」に向けて、懐古ではない、もっとアクティブな民放版「ラジオ深夜便」的な番組を仕掛けてみるのも面白いのではないか。

朝野委員

胎児がまず意識するのは、母親の心臓の鼓動だそうで、人間の五感の中で最もベーシックなものは、聴覚である。その意味で、耳から入るメディアの方が鋭く真実を突くことができると思う。今ラジオに求められているのは、単にトークでのいやしというより、人間の生理に働きかけるような意味でのいやしではないか。

櫻井委員

ラジオは、音だけの世界なので想像力もかきたてられ、自分だけの世界を作れるメディアだと思うが、そのラジオにしかできない事とは一体何だろうか考えている。答

えはなかなか見出せないが、他の媒体では出来ない、ラジオならではの番組作りに挑戦して行ってほしい。

大村副委員長

率直に言えば、ラジオはやかましく、うるさく感じることが多い。トークは、いわばアートだと思うので、話し手の力量こそが今問われているのではないか。「僧侶」の立場から言うと、聴覚は胎児の時だけではなく、死に際しても最もベーシックなものである。やはりラジオは威力があり、可能性は大きいと思う。

森委員長

ラジオの生命線は、尽きるところパーソナリティーだと思う。それも不特定多数を相手にするのではなく、特定の人に語りかけることによって、相手の心の機微とひだに触れて行くことが大切だ。そういったパーソナリティーをいかに作るかということが、ラジオの可能性を探る上でのキーポイントになるのではないか。

倉光委員（書面）

子どもの頃は、よくラジオを聞いたもので、その後の人格形成や趣味にも大きな影響を与えたと思う。今は「ながら」風に聞くものになってしまったが、今後放送と通信の融合の時代が始まると、ラジオは「ながら」型を続けるのか、別の役割を担うのか見極めが大切だ。

第9回「JNN系列近畿・中四国合同番組審議会」の報告

11月8日に岡山で開かれた今回の会議について、毎日放送番組審議会を代表して出席した正・副委員長が、その概要を報告した。